

大学生に対する内容明確化とバーバル・ノンバーバル訓練によるプレゼンテーションスキル評価の上昇

矢野 香

日本大学大学院総合社会情報研究科

Effects of Theme Understanding and Verbal/Non-verbal Training Order in College Students' Presentation

YANO Kaori

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This study aimed at examining order effects for verbal and non-verbal trainings as well as finding the effects of the difference in theme understanding on oral presentation ratings. The participants were 100 college students divided into four groups. The first and second groups were provided with a session in which the participants fully understood the presentation theme before the skill trainings. Then the first group received a verbal-skill training followed by a nonverbal-skill training. The second group received the trainings in the reverse order. The third and fourth groups had an ice-breaking session which led them not to have full understanding of the theme prior to the skill training. Then the third group received a verbal-skill training followed by a nonverbal-skill training while the fourth group received the trainings in the reverse order. The presentation by the participants were video-taped four times: before and after the theme-understanding or ice-breaking session, after the first skill training, and after the second skill training session. The recordings were rated by the experts as well as the participants themselves in terms of five aspects: Organization, Language, Delivery, Supporting Material and Central Message. The data were analyzed using three-way ANOVA (repeated measures) with Time (4) x Theme-understanding (2) x Order (2). The experts' and self-evaluation ratings were found to have improved in five aspects for all groups after three training sessions. The main effects for Theme-understanding and Order were not significant on the self-evaluation. As for the ratings by the experts, Delivery improved between the baseline and the last performance for the first and second groups while Language improved in the same manner for the first and third groups. These results imply that understanding of theme prior to skill trainings had an effect on Delivery of presentation while verbal aspect of the speech benefitted from the verbal-non-verbal order. Combined together, the highest ratings by experts were achieved on Language aspect as the participants received a verbal-skill training followed by a nonverbal-skill training when the theme was fully understood prior to the skill trainings. The results should be taken into consideration when we develop a method to improve the speech presentation for college students.

1. はじめに

大学生に対する高等教育の現場においてプレゼンテーション力の育成は大きなテーマの1つである。厚

生労働省(2004)は、企業が若者に求める「就職基礎能力」としてコミュニケーション力、職業人意識、基礎学力、ビジネスマナー、資格取得をあげている。

この中のひとつのコミュニケーション力の具体的な内容として、「状況にあった訴求力のあるプレゼンができる」という自己表現力が含まれている。なかでも身につけたい能力の習得目安として、高校卒業時程度に求められる「筋道の通った分かりやすい表現で自己表現できる」、「資料作成の準備をきちんとできる」などに加えて、大学卒業時までには「相手の理解の度合いを考慮しながら説明に工夫を加えることができる」、「相手に説得力がある説明ができる」という点を重視している。このように、プレゼンテーションといった場面で自己表現力が発揮できるような大学生に対する教育が社会から求められているという背景のもと、その育成方法が研究されている。

プレゼンテーションの能力育成を目的とした先行研究では、プレゼンテーションを行う際に必要な能力の定義づけが試みられてきた。その中では話す内容を明確化することの重要性が多く指摘されている。Dannels(2003)は、プレゼンテーションを自分の能力を専門家に提示する場であるにとらえ、専門的な分野で専門家のように話すには、プレゼンテーションの指導において、適切なジェスチャー、声の印象、スピーチから言いよどみをなくすことを教えることよりもっと重要なものがあると指摘している。牧野(2003)は、効果的なプレゼンテーションのために不可欠な視点を10項目のカテゴリーに整理した。その中で「内容」というカテゴリーにおいて、「伝えるべき論点」を準備段階で明確にしておくことの重要性を指摘した。村上ら(2010)は、大学生が獲得すべきプレゼンテーション能力として、9つの能力を定義した。そのなかで一番にあげられているのが「テーマを決定する能力」である。山下・中島(2010)は、書籍の内容分析調査を行い、プレゼンテーションに必要な能力を8つに分類した。それらの書籍の中で81.7%と一番高い割合で言及されていた能力が、「発表の目的を明確に」する、「メッセージを決める」などの「内容検討」についての能力であった。矢野(2015)は、自己紹介をテーマにしたプレゼンテーションにおいて、バーバル訓練とノンバーバル訓練の順番によるプレゼンテーションスキルの差は無く、「自己紹介」というテーマにおいて何を話すかという内容に関する理解や決定が重要であるという示唆

を得ている。

これらの先行研究が示しているように、プレゼンテーションスキルの向上のためには、まずは、プレゼンテーションにおいて話す内容を明確に把握することが重要である。プレゼンテーションスキル訓練は、内容を十分把握させた後に行うことで、プレゼンテーションスキルをより向上させることが考えられる。矢野(2015)では、バーバル・ノンバーバルの訓練順の差は見られなかったが、もし「自己紹介」というテーマにおいて話す内容が明確になっていたならば、訓練順に差がでていた可能性が考えられる。そこで本研究では、大学生のプレゼンテーションスキルがより向上するための訓練法を開発することを目的とし、プレゼンテーション講義の中でプレゼンテーションを行う内容について明確化するワークを行っているか否か、そしてバーバルとノンバーバルの訓練順について比較実験を実施し、その結果を検討することとした。

2. 方法

2.1 実験参加者

プレゼンテーションの講義を受講している大学生のうち本研究への参加を同意した100名(男性49名・女性51名)を実験参加者とした。実験参加者を、「見知らぬ複数の人がいる場所で固い雰囲気壊す」ためにおこなうアイスブレイクのワークを行った後、バーバル→ノンバーバルの順に訓練する群33名(男性18名・女性15名)と、アイスブレイクのワークを行った後、ノンバーバル→バーバルの順に訓練する群28名(男性15名・女性13名)、内容明確化のワークを行った後、バーバル→ノンバーバルの順に訓練する群20名(男性7名・女性13名)と、内容明確化のワークを行った後、ノンバーバル→バーバルの順に訓練する群19名(男性9名・女性10名)という4群に分けた。参加者には実験の目的と内容を説明し、参加するかどうかは成績評価に関係がないこと、なんら不利益を被ることなくいつでも実験を辞退できること、個人情報を守られることを口頭と書面で伝え同意書に署名を得た。なお、本研究については長崎大学倫理委員会の承認を得ている(承認番号15062618)。

2.2 手続き

訓練するプレゼンテーションスキルは、「話す内容を明確にすること」、そしてバーバルスキルのなかから「話の組み立て方」、「文章・言葉づかい」、ノンバーバルスキルのなかから「声」、「表情」、「ジェスチャー」の6つとした。トレーニングは1回90分、各群は日時を別にして2015年5月から6月にかけて、それぞれ3回の訓練を実施した。はじめに、ベースラインとして実験参加者は「自己紹介」をテーマに1分のプレゼンテーションを行なった後、訓練を実施した。実験計画を表1に示す。

		1	2	3			
I アイス・V先群	ベースライン撮影	アイスブレイク	撮影 ①	V	撮影 ②	NV	撮影 ③
II アイス・NV先群		アイスブレイク		NV		V	
III 内容・V先群		内容	V	NV			
IV 内容・NV先群		内容	NV	V			

話す内容を明確にする訓練では、プレゼンテーションについてキーワードが明確であることの重要性について教示（パワーポイントによる説明）し、モデリング（例文紹介）の後、自己紹介のなかで自分の「強み」として紹介する能力をみつける行動リハーサル（ワークシート記入、ペアワークで実践）を行なった。さらに、その能力について15文字以内でまとめるよう指示を出した（教示）。これは実際のプレゼンテーションにおいてこの15文字の言葉をキーワードとして原稿の中に入れて話すためである。なお、話す内容を明確にする訓練を実施しない統制群では、同じグループのメンバーとの慣れの度合いを実験群と等しくするため、同じ時間だけアイスブレイク目的のワークを行なった。バーバル訓練では、「話の組み立て方」として、結論、根拠、例示、結論の順に話すPREP法を教示（パワーポイントによる説明）し、モデリング（例文紹介）、行動リハー

サル（ワークシート記入、ペアワークで実践）の順で訓練を行なった。また、「文章・言葉づかい」として、一文を短く50文字以内でまとめることについて、教示（パワーポイントによる説明）、モデリング（例文紹介）、行動リハーサル（ワークシート記入、ペアワークで実践）の順で訓練を行なった。ノンバーバル訓練では、「声」として、相手に届く大きな声について教示（パワーポイントによる説明）し、モデリング（講師による手本）、行動リハーサル（ペアワークで実践）の順で訓練を行なった。また、「表情」として、話に合わせて表情豊かに話すこと、アイコンタクトを取りながら笑顔を見せながら話すことについて、教示（パワーポイントによる説明）し、モデリング（例文紹介）、行動リハーサル（ペアワークで実践）の順で訓練を行なった。「ジェスチャー」として、ジェスチャーをするタイミングやジェスチャーの位置について教示（パワーポイントによる説明）し、モデリング（講師による手本）、行動リハーサル（ペアワークで実践）の順で訓練を行なった。

2.3 独立変数と従属変数

独立変数は実験参加者の各スキル訓練、従属変数は実験参加者本人による自己評価得点と専門家による評価得点とした。実験参加者によるスキルの自己評価は、プレゼンテーション終了後すぐに質問紙による評定を行なった。評価には、AAC&U (Association of American Colleges & Universities: アメリカ大学・カレッジ協会) の許可を得たうえでルーブリックの中から、「Oral communication」を日本語に訳したシートを作成し使用した。「体系化」「言語」「話し方」「資料」「メインメッセージ」の項目について、1. 優、2. 良、3. 可、4. 不可の四段階評価でたずねた（巻末資料参照）。専門家によるスキルの他者評価は、プレゼンテーションを撮影した動画を使い、後日評定された。専門家として2名の現役のアナウンサーに評価を依頼し、2名の平均値を使用した。評価には、自己評価と同様のルーブリックを使用した。

表2 自己評価における各項目の平均値とSD

		アイスV先(n=33)				アイスNV先(n=28)				内容V先(n=20)				内容NV先(n=19)				
		ベース	1回目	2回目	3回目	ベース	1回目	2回目	3回目	ベース	1回目	2回目	3回目	ベース	1回目	2回目	3回目	
体系化	平均値	2.00	2.44	2.67	2.67	2.00	2.38	2.38	2.38	3.00	2.44	2.44	2.94	3.00	2.23	2.23	2.62	3.00
	SD	.71	.73	.73	.50	.76	.74	.74	.76	.51	.63	.68	.37	.44	.44	.51	.41	
言語	平均値	2.00	2.44	2.56	2.67	1.88	2.25	2.38	2.38	2.31	2.50	2.63	2.81	2.15	2.39	2.46	2.69	
	SD	.50	.73	.53	.50	.84	.46	.52	.52	.48	.52	.81	.66	.56	.51	.52	.63	
話し方	平均値	1.67	2.11	2.22	2.78	2.25	2.13	2.50	2.38	2.31	2.25	2.69	2.81	2.31	2.08	2.54	2.69	
	SD	.71	.93	.44	.67	.89	.64	.53	.52	.70	.68	.53	.54	.48	.64	.52	.48	
資料	平均値	1.00	1.30	1.67	1.50	1.00	1.25	1.38	1.50	1.40	1.67	1.87	2.07	1.50	1.40	1.80	2.00	
	SD	.00	.82	.82	.84	.00	.46	.52	.53	.51	.82	.92	1.03	.53	.52	.92	.94	
メインメッセージ	平均値	2.22	3.11	3.11	3.11	2.38	2.38	2.50	2.63	2.50	2.44	2.81	3.00	2.08	2.39	2.85	2.85	
	SD	.67	.78	.33	.60	.74	.74	.76	.52	.52	.89	.83	.73	.76	.51	.38	.81	

3. 結果1 実験参加者による自己評価

有効回答数は、大学生 100 名(男 49 名、女 51 名)であった。内容明確化訓練の有無(内容明確化かアイスブレイクか) × 訓練順(バーバルが先かノンバーバルが先か) × 訓練回数(ベース、1回目、2回目、3回目)の三要因の分散分析法で分析を行った。結果を表2と図1~5に示した。図中の黒丸がアイスブレイク後、バーバル訓練→ノンバーバル訓練を行った群、黒四角がアイスブレイク後、ノンバーバル訓練→バーバル訓練を行った群、灰色の三角が内容明確化ワーク後、バーバル訓練→ノンバーバル訓練を行った群、灰色の丸が内容明確化ワーク後、ノンバーバル訓練→バーバル訓練を行った群の結果を示している。

3.1 体系化

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している(図1参照)。「体系化」についての自己評価は、回数の主効果のみが有意であった($F(3, 126)=16.29, p<.01$)。ベースラインと2回目・3回目、1回目と3回目の間で5%水準で有意な差が見られた(Bonferroni)。

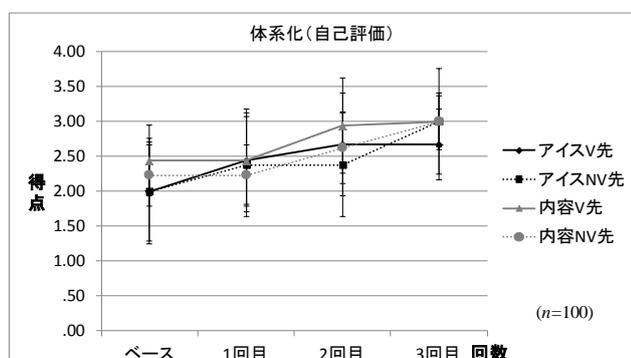


図1 体系化 自己評価

3.2 言語

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している(図2参照)。「言語」についての自己評価は、回数(主効果のみ)が有意であった($F(2.41, 101.26)=10.30, p<.01$)。ベースラインと2回目・3回目の間で5%水準で有意な差が見られた(Bonferroni)。

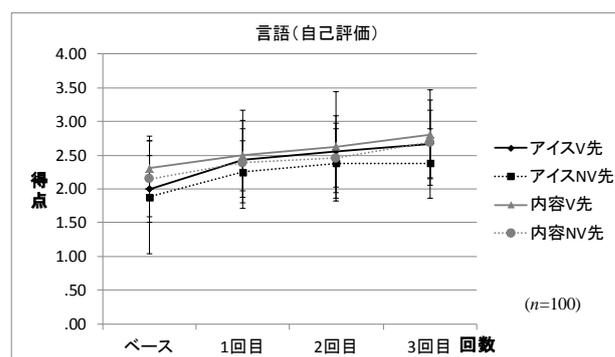


図2 言語 自己評価

3.3 話し方

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している(図3参照)。「話し方」についての自己評価は、回数(主効果のみ)が有意であった($F(2.57, 107.71)=8.65, p<.01$)。ベースラインと3回目、1回目と2回目・3回目の間で5%水準で有意な差が見られた(Bonferroni)。

3.4 資料

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している(図4参照)。「資料」についての自己評価は、回数(主効果のみ)が有意であった($F(2.10, 73.34)=8.03, p<.01$)。ベースラインと2回目・3回目の間で5%水

準で有意な差が見られた (Bonferroni)。

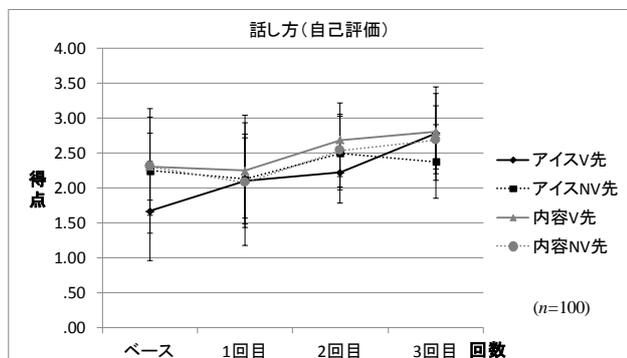


図3 話し方 自己評価

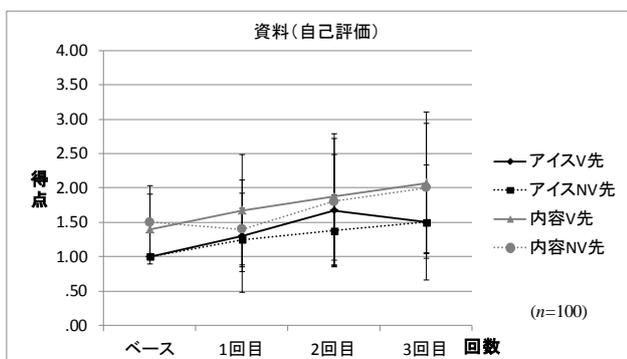


図4 資料 自己評価

3.5 メインメッセージ

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している (図5参照)。「メインメッセージ」についての自己評価は、回数の主効果($F(3, 126)=8.29, p<.01$)と、バーバル訓練が先か、ノンバーバル訓練が先かの訓練順の主効果($F(1, 42)=4.54, p<.05$)が有意であった。また、交互作用 (回数×内容明確化訓練の有無×訓練順) は有意傾向が認められた($F(3, 126)=2.42, p<.10$)。単純主効果の検定を行ったところ、内容明確化を行いバーバル訓練が先の群では、ベースラインと1回目・2回目・3回目の間で5%水準で有意な差が見られ

表3 評価者評価における各項目の平均値とSD

	アイスV先(n=13)				アイスNV先(n=11)				内容V先(n=20)				内容NV先(n=17)				
	ベース	1回目	2回目	3回目	ベース	1回目	2回目	3回目	ベース	1回目	2回目	3回目	ベース	1回目	2回目	3回目	
体系化	平均値	1.69	2.00	2.00	2.39	1.91	2.18	2.23	2.55	1.65	1.90	2.05	2.53	1.82	1.94	2.03	2.74
	SD	.33	.50	.41	.36	.44	.60	.52	.57	.33	.60	.58	.72	.53	.61	.48	.31
言語	平均値	1.62	1.69	1.73	1.92	1.96	2.05	2.00	2.32	2.10	2.18	2.33	2.50	2.03	2.06	2.03	2.06
	SD	.30	.44	.39	.45	.47	.47	.39	.41	.48	.44	.55	.59	.28	.24	.33	.35
話し方	平均値	1.58	1.77	1.85	2.35	1.86	1.95	2.23	2.36	1.73	1.98	2.10	2.20	2.09	2.03	2.09	2.15
	SD	.19	.33	.52	.52	.45	.47	.65	.50	.30	.41	.50	.52	.36	.41	.40	.23
資料	平均値	1.65	1.73	1.58	2.12	1.77	2.00	2.00	2.18	1.80	1.83	2.10	2.20	1.88	1.71	1.85	1.82
	SD	.24	.26	.19	.62	.26	.32	.39	.40	.41	.41	.58	.62	.38	.36	.39	.39
メインメッセージ	平均値	1.81	1.96	2.19	2.58	1.91	2.00	2.32	2.41	1.80	2.05	2.50	2.58	1.76	1.88	2.29	2.74
	SD	.48	.56	.43	.49	.54	.74	.64	.54	.47	.58	.63	.59	.56	.52	.66	.36

た (Bonferroni)。アイスブレイクでノンバーバル訓練が先の群では、ベースラインと2回目・3回目の間で5%水準で有意な差が見られた (Bonferroni)。

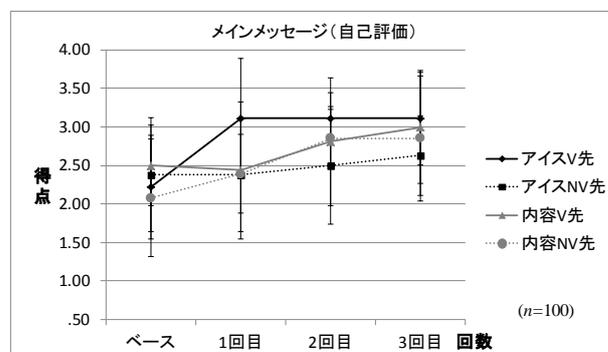


図5 メインメッセージ 自己評価

4. 結果2 専門家による評価

有効回答数は、大学生 61 名(男 28 名、女 33 名)であった。それぞれの訓練後に行なったプレゼンテーションを動画に撮影し、その動画を専門家が評価した評定の推移を、内容明確化訓練の有無 (明確化ワークかアイスブレイクか) × 訓練順 (バーバルが先かノンバーバルが先か) × 訓練回数の三要因の分散分析法で分析を行った。結果を表 3 と図 6~12 に示した。自己評価同様に、図中の黒丸がアイスブレイク後、バーバル訓練→ノンバーバル訓練を行った群、黒四角がアイスブレイク後、ノンバーバル訓練→バーバル訓練を行った群、灰色の三角が内容明確化ワーク後、バーバル訓練→ノンバーバル訓練を行った群、灰色の丸が内容明確化ワーク後、ノンバーバル訓練→バーバル訓練を行った群の結果である。

4.1 体系化

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している (図 6 参照)。「体系化」についての外部評価は、

回数の主効果が有意であった($F(2.59, 147.86)=49.54, p<.01$)。また、交互作用(回数×内容明確化訓練)は10%水準で有意傾向であった($F(2.59, 147.86)=2.35, p<.10$)。単純主効果の検定を行ったところ、内容明確化を行う群では、ベースラインと1回目、ベースラインと2回目に5%水準で、ベースラインと3回目、1回目と3回目、2回目と3回目に1%水準で有意差があった。アイスブレイクを行う群では、ベースラインと2回目、ベースラインと3回目、1回目と3回目、2回目と3回目の間で1%水準で有意な差が見られた(Bonferroni)。図7に体系化における内容明確化群とアイスブレイク群にまとめたグラフを記す。

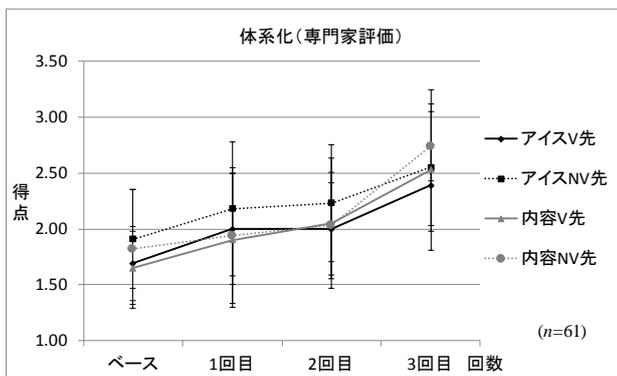


図6 体系化 専門家評価

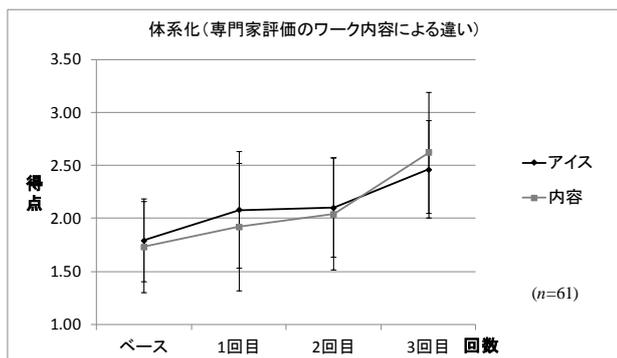


図7 「体系化」 専門家評価のワーク内容による違い

4.2 言語

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している(図8参照)。「言語」についての外部評価は、言語では、回数の主効果が有意であった($F(2.33, 127.02)=8.90, p<.01$)。また、内容明確化とアイスブレイク

イクの内容明確化訓練の有無の主効果が有意であった($F(1,57)=7.97, p<.01$)。内容明確化訓練の有無と訓練順の交互作用は有意であった($F(1,57)=4.70, p<.01$)。回数の主効果が有意であり、ベースラインと3回目、1回目と3回目、2回目と3回目の間で1%水準で有意な差が見られた(Bonferroni)。また、交互作用(回数×内容明確化訓練の有無×訓練順)は有意傾向が認められた($F(1, 57)=10.39, p<.01$)。単純主効果の検定を行ったところ、バーバルを先に訓練した群において、内容明確化訓練をおこなった場合とアイスブレイクを行った群に有意な差がみられた(内容明確化>アイスブレイク)。次に内容明確化ワークをした群において、バーバルを先に訓練した場合とバーバルを先に訓練した場合に5%水準で有意な差がみられた(バーバル先>ノンバーバル先)。またアイスブレイクをした群において、バーバルを先に訓練した場合とバーバルを先に訓練した場合に5%水準で有意な差がみられた(バーバル先<ノンバーバル先)。交互作用の結果、ノンバーバルを先に訓練した場合は内容明確化訓練の有無による差がない一方、バーバルを先に訓練した場合は内容明確化のワークした群の方が得点が高い結果となった。(アイスブレイク・バーバル先(1.740)<内容明確化・バーバル先(2.275))。図9に「言語」におけるバーバルを先に教えた群とノンバーバルを先に教えた群にまとめたグラフを記す。

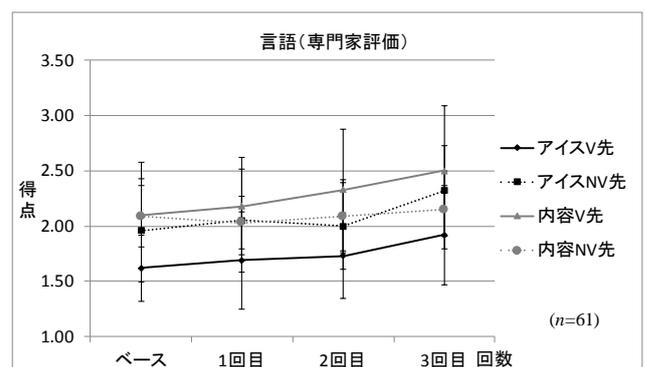


図8 言語 専門家評価

4.3 話し方

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している(図10参照)。「話し方」についての外部評価は、回数の主効果が有意であった($F(3, 171)=24.95,$

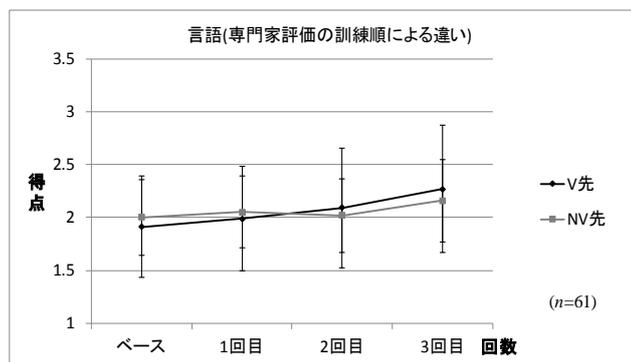


図9 「言語」 専門家評価の訓練順による違い

$p<.01$). また、交互作用 (回数×内容明確化訓練の有無) は有意傾向が認められた ($F(3, 171)=4.47, p<.01$). 単純主効果の検定を行ったところベースラインにおいて、内容明確化とアイスブレイクに 5%水準で有意差がみられた。ベースラインにおける内容明確化群は 1.720、アイスブレイク群は 1.907 と、アイスブレイク群が高い。しかし、1 回目以降差がないことから、内容明確化のワークを行うことで、差がなくなったといえる。内容明確化群で、ベースラインと 2 回目の間で 5%水準で有意差が見られた (Bonferroni)。ベースラインと 3 回目、1 回目と 3 回目、2 回目と 3 回目の間で 1%水準で有意差が見られた (Bonferroni)。アイスブレイク群で、1 回目と 3 回目の間で 5%水準で、ベースラインと 3 回目の間で 1%水準で有意差が見られた (Bonferroni)。

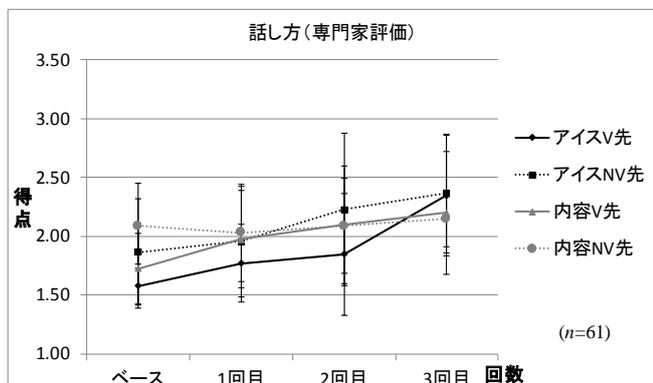


図10 話し方 専門家評価

4.4 資料

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇してい

る (図 11 参照)。「資料」についての外部評価は、回数の主効果が有意であった ($F(2.34, 133.52)=9.47, p<.01$)。また、交互作用 (回数×内容明確化訓練の有無×訓練順) は有意傾向が認められた ($F(1, 57)=5.71, p<.05$)、単純主効果の検定を行ったところ有意なものはみられなかった。交互作用 (回数×内容明確化訓練の有無) は有意傾向が認められた ($F(2.34, 133.52)=3.43, p<.05$)ので単純主効果の検定を行った。結果、回数ごとに内容明確化群とアイスブレイク群で有意な差はみられなかった。内容明確化群では、ベースラインと 3 回目、2 回目と 3 回目で 1%水準で有意な差が見られた (Bonferroni)。また、アイスブレイク群では、1 回目と 2 回目に 5%水準で有意差がみられた (Bonferroni)。

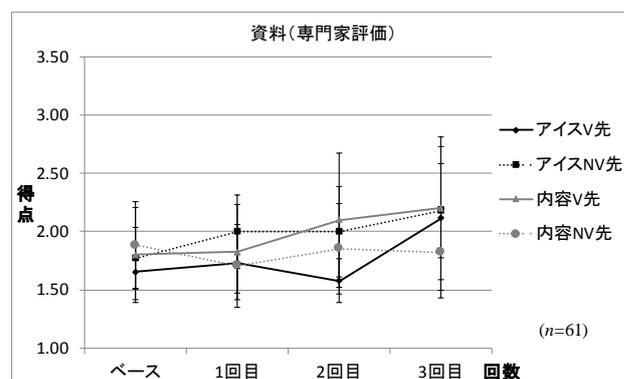


図11 資料 専門家評価

4.5 メインメッセージ

訓練が進むに従って、どの群も得点が上昇している (図 12 参照)。「メインメッセージ」についての外部評価は、回数の主効果が有意であった ($F(2.50, 142.38)=34.68, p<.01$)ので、多重比較を行ったところベースラインと2回目、ベースラインと3回目、1回目と2回目、1回目と3回目、2回目と3回目の間で1%水準で有意な差が見られた (Bonferroni)。

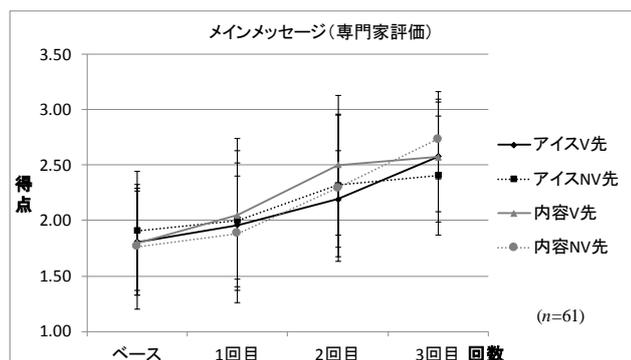


図12 メインメッセージ 専門家評価

5. 考察

実験参加者による自己評価では、三要因分散分析の結果から、最初に内容明確化のワークをするか、アイスブレイクをするかと、バーバルを先に訓練するかノンバーバルを先に訓練するかの違いに関わらず、すべての項目において回数の主効果がみられたため、内容明確化のワークの有無やバーバル・ノンバーバルの訓練順の違いに関係なく、すべての項目で最終的には自己評価が上昇すると言える。

「メインメッセージ」の自己評価については、訓練順の主効果が有意で、交互作用（回数×内容明確化訓練の有無×訓練順）も有意傾向が認められ、内容明確化を行いバーバルを先に訓練した群では、ベースラインと1回目・2回目・3回目の間で有意な上昇が、アイスブレイクでノンバーバルを先に訓練した群では、ベースラインと2回目・3回目の間で有意な上昇があったことから、「メインメッセージ」について自己評価をあげるには、プレゼンター本人が伝えたい内容が明確である場合はバーバルを先に、内容があいまいな場合には、ノンバーバルを先に教えたほうが「メインメッセージ」の自己評価があがる可能性が示唆された。

専門家評価では、三要因分散分析の結果から、最初に内容明確化のワークをするか、アイスブレイクをするかという内容明確化の有無と、バーバルを先に訓練するかノンバーバルを先に訓練するかの違いに関わらず、すべての項目において回数の主効果がみられたため、内容明確化の有無やバーバル・ノンバーバルの訓練順の違いに関係なく、最終的にはプレゼンテーションに対する評価が上がることを確認

された。このことから、少なくとも訓練内容がスキル向上に有効であったことが確認された。

「体系化」については、内容明確化を行う群とアイスブレイクを行う群は、ともにベースから3回目まで得点が有意に上がるが、各回数においては差がないことが示された。単純主効果の検定結果で内容明確化を行う群では、ベースラインよりも1回目と2回目が、さらにそれよりも3回目が有意に上昇しており、アイスブレイクを行う群では、ベースラインよりも2回目さらにそれよりも3回目が、1回目よりも3回目が有意に上昇していることから、「体系化」について、内容明確化のワークを行うと、操作介入が入るベースラインと1回目の間で得点上がるのに対し、アイスブレイクの場合は上がらないといえる。つまり「体系化」において内容明確化のワークが有効であるといえる。

「言語」については内容明確化訓練の有無の主効果が有意であり、交互作用の結果、バーバルを先に訓練した群において、内容明確化訓練をおこなった場合の方がアイスブレイクを行った場合よりも得点が高かったことから、内容明確化の訓練が効果的であるといえる。さらに、内容明確化ワークをした群において、バーバルを先に訓練した場合のほうが、ノンバーバルを先に訓練した場合よりも得点が高かったことから、内容明確化ワークをしたうえでバーバルを訓練することが効果が高いといえる。また、アイスブレイクをした群において、ノンバーバルを先に訓練した場合がバーバルを先に訓練した場合よりも得点が高かったことから、内容が明確ではない場合はノンバーバルを先に訓練したほうが効果があることが示唆された。ノンバーバルを先に訓練した場合は内容明確化訓練の有無による差がない一方、バーバルを先に訓練した場合は内容明確化のワークを行った群の方が得点が高い結果となった。これらのことから、バーバルを先に訓練した場合には、内容明確化のワークとアイスブレイクのワークには差があり、内容明確化のワークが有効であることがうかがえる。つまり内容明確化のワークをした上でバーバルを先に教える方法が、最も「言語」についての専門家評価をあげることが示唆された。

「話し方」では、内容明確化の場合もアイスブレ

イクの場合もどちらもベースラインと3回目で有意に上昇しているため、「話し方」においては効果の差はなかった。

「資料」では、内容明確化の場合はベースラインと3回目で有意に上昇しているが、アイスブレイクの場合は1回目と2回目で上昇していることから、内容明確化ワークをした場合の方が最終的な得点があがる可能性がある。

「メインメッセージ」は、回数の主効果のみが有意であることから、内容明確化ワークの有無やバーバル・ノンバーバルの訓練順の違いに関係なく、最終的には専門家評価が上がると言える。

本研究では、内容について明確にするワークを行ったうえでバーバル訓練とノンバーバル訓練について訓練する順番の違いによって、自己評価、専門家評価の評定値に差が生じるという仮説を立てた。内容明確化をしたうえでバーバルを先に訓練する群において、自己評価の「メインメッセージ」と専門家評価の「言語」の項目について、ほかの群よりも有意に評価が上昇した。つまり、内容明確化をおこなった場合には、バーバルを先に訓練したほうが自己評価の「メインメッセージ」と専門家評価の「言語」に対して効果が高いといえる。

前述のように、自己評価も専門家評価もすべての項目で回数の主効果が認められたことから、この訓練内容で実験参加者の実際のプレゼンテーションのスキルは上達したといえるであろう。しかしながら、専門家評価が上昇しているにもかかわらず自己評価が上がらないなど、自己評価と専門家評価には相違点がみられた。自分のプレゼンテーションについて客観的に捉える力は不可欠である。これができないと、中味のない話をしているにもかかわらずプレゼンテーションのスキルによって大きめに伝えたり、中味のある話をしているにも関わらずプレゼンテーションのスキル不足によって伝わりにくかったりして、大学教育で目指している「状況にあった訴求力のあるプレゼン」はできない。今後はこれら自己評価と専門家評価の相違を解消する方法の検討、たとえば、実験参加者に自らのプレゼンテーションの動画をみせてフィードバックを与えていくなどの検討が必要である。

引用文献

- American Association of Colleges & Universities. (2014). Oral Communication VALUE Rubric | Association of American Colleges & Universities
<https://www.aacu.org/value/rubrics/oral-communication> (2015.12.28.取得)
- Dannels, D. R. (2003). Teaching and learning design presentations in engineering - Contradictions between academic and workplace activity systems. *Journal of Business and Technical Communication*, 17(2), 139-169.
- 今村光彰. (2014). アイスブレイク 出会いの仕掛け人になる. 晶文社, 22-23.
- 厚生労働省 (2004). 『若年者の就職能力に関する実態調査』結果, 厚生労働省.<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/h0129-3.html> (閲覧日: 2015年12月15日)
- 厚生労働省 (2009). 若年者就職基礎能力の習得の目安委員会報告書, 厚生労働省.<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/07/dl/h0723-4h.pdf> (閲覧日: 2015年12月15日)
- 牧野由香里. (2003). プレゼンテーションにおける自律的学習のための学習環境デザイン. *日本教育工学会論文誌*, 27(3), 325-335.
- 村上和繁・正木幸子・松永公廣 (2010). プレゼンテーション教育でのリフレクションの強化(1)プロトコルから見た気づきの差異. *教育システム情報学会研究報告*, 24(5), 82-87.
- 山下祐一郎・中島平. (2010). プレゼンテーション能力の評価方法確立のための書籍調査とその評価法を用いた情報システムの開発. *教育情報学研究*, 9, 63-70.
- 矢野香. (2003). プレゼンテーションスキル評価に及ぼすバーバルおよびノンバーバル訓練の訓練順の効果. *長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要*, 6, 11-19.

(Received: January 21, 2015)

(Issued in internet Edition: February 8, 2016)

付表 1

評価用 ルーブリック

	4 (優)	3 (良)	2 (可)	1 (不可)
体系化	話の組み立て(最初に結論が明確、中身で根拠が語られている)が明確で、その話の流れは巧みであり、プレゼンテーションの内容がまとまっている。	話の組み立て(最初に結論が明確、中身で根拠が語られている)が明確である。	話の組み立て(最初に結論が明確、中身で根拠が語られている)が、プレゼンテーションの中で部分的にはできているところもある。	話の組み立て(最初に結論が明確、中身で根拠が語られている)が、プレゼンテーションの中でまったくできていない。
言語	言語の選び方が想像力豊かで、記憶に残る。説得力もあり、プレゼンテーションの効果を高めている。聞き手に分かりやすい言葉を使っている。	言語の選び方に工夫したあとがみられ、プレゼンテーションをサポートする効果がある。聞き手に分かりやすい言葉を使っている。	言葉の選び方は、日常的かつ一般的なものではあるが、部分的にはプレゼンテーションの効果をサポートしている。聞き手に分かりやすい言葉を使っている。	言葉の選び方が不明確で、プレゼンテーションにとって最小限程度しか役に立っていない。聞き手に分かりにくい言葉を使っている。
話し方	姿勢、ジェスチャー、アイコンタクト、声の大きさ、表現力などの話し方の技術によって、プレゼンに説得力が増し、プレゼンターも自信をもって堂々と話しているように見える。	姿勢、ジェスチャー、アイコンタクト、声の大きさ、表現力などの話し方の技術によってプレゼンが面白くなり、プレゼンターも緊張せずに話しているように見える。	姿勢、ジェスチャー、アイコンタクト、声の大きさ、表現力などの話し方の技術によってプレゼン内容は理解はできるものの、プレゼンターも戸惑いがちである。	姿勢、ジェスチャー、アイコンタクト、声の大きさ、表現力などの話し方の技術はプレゼン内容を理解しづらくして、プレゼンターも緊張している。
資料	資料(イラスト、統計、類推、引用など)は、情報をわかりやすく分析していて、プレゼンテーションをかなりサポートしている。プレゼン内容やプレゼンターの信頼性を確立している。	資料(イラスト、統計、類推、引用など)は、情報をわかりやすく分析していて、プレゼンテーションをまあまあサポートしている。プレゼン内容やプレゼンターの信頼性を確立している。	資料(イラスト、統計、類推、引用など)は、プレゼンテーションを少しはサポートしている。プレゼン内容やプレゼンターの信頼性を確立している。	資料(イラスト、統計、類推、引用など)は、不十分でわかりづらい。
メッセージ	メインメッセージは説得力がある。(分かりやすく語られ、適度に繰り返され、記憶にのこる。その内容も支持できる)	メインメッセージは明確で資料と一致している。	メインメッセージは、基本的には理解できるが、繰り返されておらず、記憶に残らない。	メインメッセージは、推定することはできるが、はっきりとプレゼンテーション内で述べられていない。